

お茶の時間 フェイクニュースと 事実の危機

編集委員 井上 廣司

最近フェイクニュースに関する報道で、事実の危機が指摘されている。その原因が、最新技術の発達と国家規模のフェイクニュースの発信である。

●最新技術の発達

最近「インフォカリプス」という言葉が囁かれている。これは、「インフォメーション（情報）」とヨハネの黙示録から採った「アポカリプス（黙示）」からできた造語で、情報化時代の混乱を表す言葉である。

それを代表するのが、口の動きだけを抽出して、他の動画に張り付ける技術である。例えば、トランプ大統領のホワイトハウスにおける動画を加工して、「これから核攻撃を開始する」という音声を重ね合わせ、緊急ニュースとしてSNS（ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス）を使って流したらどうなるか。

最近の技術の発達は、想像以上のものがあり、手口が巧妙化したフェイクニュースがいとも簡単に制作され、拡散することができるようになっている。

●ウクライナでのフェイクニュース
もう一つの懸念が、国家によるフェイクニュースの発信である。

5月末、ウクライナ当局がロシア人記者アルカジー・バブチェンコ氏の死亡に関する偽情報を流したことが明らかになった。

彼は、プーチン政権を批判し、昨年8月からウクライナで亡命生活を送っていたが、ウクライナ当局が「射殺された」と発表したものの、翌日記者会見場に自ら姿を見せて生存を公表した。

ウクライナの保安局によれば、バブチェンコ氏がロシア情報機関に命を狙われており、容疑者グループを割り出すため本人を巻き込んだ作戦を展開し、虚偽の情報を流したと発表した。

騒動の背景は、2014年のウクライナ南部クリミア併合を巡るロシアとの敵対関係があり、両国は非難合戦を展開している。ウクライナ問題について、独仏を交えた4カ国会談が行われる予定だが、国際的な関心は年ごとに低下しており、ウクライナとしては国際的関心を高めたいとの思惑がある。

国家が発表する情報が、偽情報かもしれないと思われることは、情報、メディアに対する信用の失墜につながり、国家間の疑心暗鬼を生むことになりかねない。